Journal of Culture and Information Science, 7(2), 21-23,（March 2012）

資料紹介

正倉院宝飾鏡の鳳凰文様について

－定性分析からの観点－

安藤真理子

1．1　はじめに―日本文化の文様―

私達の身の回りには文様が溢れている。文様は装飾の意味合いが強いが、単なるデザインではない。その中には思想や民俗性、その時代や地域の世情および文化交流などの情報も含まれている。正倉院の文様がその典型で、ローマ等の西方から唐の都・長安を繋ぐシルクロードを経て日本へと渡来し、日本独自の意味合いや好みが付加されて今日まで至っている。日本文化は融合された文化と言われるが、その意味で正倉院の文様はそれを具体的に示すものと言える。

1．2　文様分析の研究法

正倉院宝物の多岐かつ詳細な研究を試みた研究者の一人が林良一氏である。林氏は「唐朝の国都長安がシルクロードの終着駅であるとすれば、正倉院はそうした貴重な荷物を満載したままの貨車を入れた車庫であるといってよいだろう」とし、国際色豊かな多種多様の文様を幾何文、自然現象文、実在動物文、空想的動物文、実在植物文、空想的植物文に分け、その分類を基に用いて樹下動物文と人物文、狩猟文の分析をおこない、西方での元来の意味と様式がいかに変容し中国化していったのかを明らかにした。

しかし、このように分類研究されてきた正倉院の文様ではあるが、表現が異なるにもかかわらずひとつにまとめて分類されている文様があるのもまた事実であり、その一例が鳳凰文様である。

鳳凰とは古代中国において麟、亀、竜とともに四瑞として尊ばれた想像上の霊鳥である。鳳凰の形態は、前は麟、後ろは鹿、頸は蛇、尾は魚、背は亀、頷は燕、嘴は鶏に似て羽には五色の紋があると定義される。しかし、実際の文様表現としては鶏冠があり、首長で体に対して長く尾羽を有する足長の大型鳥で表されることが多い。また吉祥を表す仙人を背に乗せていたり、綬や草木花を咥えていることもある。

吉岡幸雄 1996 年『日本の文様図典』紫紅社より転載

鳳凰文様について今回分析対象とした正倉院宝飾鏡 9 面の各鳳凰表現を見ていくと、尾羽の表現に 4 点、鶏冠に 2 点、胸毛の表現に 2 点、付属表現に 1 点の違いが見られることがわかった。

尾羽の違いには①尾羽が上方に跳ね上がった状態で表現されているものとそうでないもの②尾羽根本の羽の枝分かれの有無③尾羽の下の羽の有無④尾羽の羽の動きを渦巻き状に表現しているものとしていないものが存在した。

鶏冠については①鶏冠の有無②鶏冠が豆冠であるものとないものがあった。

胸毛については①胸毛表現の有無②胸毛を直線で表現しているものと曲線で表現しているものとが見られた。

最後の付属表現であるが①吉祥を表す綬や草木花を咥えているものと何も咥えていないものが見受けられた。

このようにひと口で「鳳凰」文様と言われているものも詳細に検討すれば様々な違いがあり、そ

	尾羽				鶏冠		胸毛		付属品
	①	②	③	④	①	②	①	②	①
北倉第2号鏡－1	0	0	1	1	1	1	1	1	0
北倉第2号鏡－2	1	0	0	0	1	0	1	0	0
北倉第3号鏡	1	1	1	1	1	1	1	1	1
北倉第12号鏡	1	1	1	1	1	0	1	1	1
南倉第1号鏡－1	1	0	0	0	1	1	1	0	0
南倉第1号鏡－2	1	1	1	1	1	0	1	1	0
南倉第3号鏡－2	1	1	0	1	0	0	0	0	0
南倉第3号鏡－3	1	0	1	1	0	0	0	0	0
南倉第7号鏡	1	0	1	1	0	0	0	0	0
南倉第9号鏡－1	0	1	0	0	0	0	1	1	0
南倉第9号鏡－2	0	0	0	1	1	0	1	1	0
南倉第9号鏡－3	0	0	0	0	0	0	1	0	0
南倉第11号鏡	1	0	1	1	1	1	1	0	0
南倉第13号鏡－1	0	0	0	0	1	1	1	1	0
南倉第13号鏡－2	1	1	0	1	1	0	1	0	0

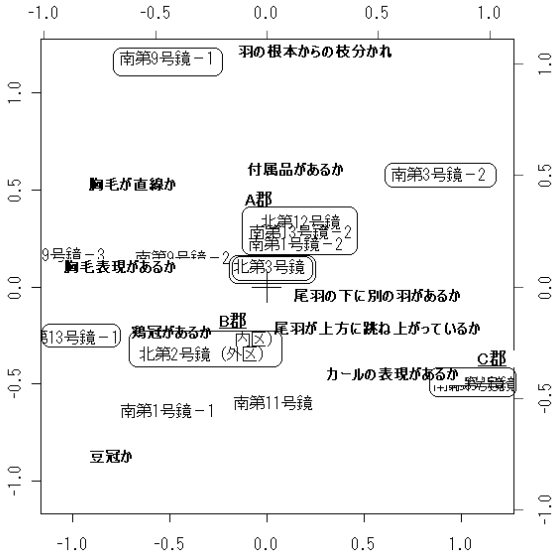
正倉院宝飾鏡の鳳凰文様分析データ

れぞれが異なった文化に基づいている可能性、あるいは元の文様からの変化があったと推測できる。

そこで、この問題を明らかにするために複数のデータの特徴や類似性について分析する手法の一つである数量化Ⅲ類を用いて検証をおこなった。なお、今回の分析に使用した鳳凰はほぼ同じ形態をとる北倉第 2 号鏡、北倉第 3 号鏡、北倉第 12 号鏡と南倉第 1 号鏡、南倉第 3 号鏡、南倉第 7 号鏡、南倉第 9 号鏡、南倉第 11 号鏡、南倉第 13 号鏡である。また、同じ鏡であるにもかかわらず、ほぼ同じ形態でも視覚的に分かる違いがある鳳凰表現や鳳凰になりうる可能性があるものについては南第 1 号鏡－1 のように番号をつけて同鏡の中でも区別した。このようにした理由として、一つの鏡の中にも異なる表現の鳳凰文様が存在することは鳳凰表現に変化があったことを顕著に示しているのではないかと考えたからである。さらに、同じ鏡でも表現が異なる為に同じ鏡であっても違うグループに分類されれば、その鏡の表現のルーツや他の鏡の表現との繋がりを見つけられるのではないかと期待したからである。

1.3 分析結果・考察

分析結果の図より、北倉第 3 号鏡の鳳凰表現が今回の鳳凰表現分類の平均となることが分かる。その特徴をまとめれば「尾が上方に跳ね上がり、尾羽の根本からの枝分かれがあり、尾羽の渦巻き表現を有して尾羽の下に羽が別にある。鶏冠があり、その鶏冠は豆冠で、胸毛表現があって直線で表現されている上に付属品も有している」となる。これに近いのが、北倉第 12 号鏡、南倉第 13 号鏡－2、南倉第 1 号鏡－2 であり、この鏡群を A 群とした。この A 群と対象的と言えるのが B 群



数量化Ⅲ類・バイプロット図

の北倉第 2 号鏡の 2 種類の鳳凰表現である。

この北倉第 2 号鏡の 2 種類の鳳凰の特徴は尾羽根本からの羽の枝分かれが無く、鶏冠表現を有し、胸毛表現はあるものの吉祥を表す付属表現が見られないことである。そして、この 2 種類の鳳凰の尾羽の表現は繊細である。

次に C 群とした鏡群は南倉第 3 号鏡 -3 と南倉第 7 号鏡の表現である。この 2 つの鳳凰表現は特に鶏冠がないことと胸毛表現が無いことが特徴である。

図の中でも特に目をひく鏡が南倉第 9 号鏡－1 である。この南倉第 9 号鏡－1 は鳳凰表現を調べる上で鳳凰との違いを見るために今回意図的に分析対象に入れた鶏表現である。その特徴は鶏冠を有する頭が体長に対して小さいうえに体全体に直線で表現された毛を有して垂れ下がった尾羽で表現されることである。この鶏表現が他の鏡から離れた表現であるということは、鳳凰表現が違う意図をもって作られていたことがわかる。

以上の結果を踏まえると、北倉第 3 号鏡が今回の正倉院宝飾鏡の鳳凰表現の平均となり、これに対して A 群の鳳凰表現は根本から枝分かれして毛の動きが渦巻き状態に表された尾羽が跳ね上がった状態で、豆冠の鶏冠を有し、胸毛表現がある鳳凰表現であり、B 群は北倉第 2 号鏡の尾羽根本からの羽の枝分かれが無く、鶏冠表現を有し、胸毛表現はあるものの吉祥を表す付属表現が見られない 2 種類の鳳凰表現であった。そして C 群は鶏冠と胸毛表現がない鳳凰表現であった。

「鶏とは異なる」と意識され、今回の鳳凰表現の平均となった北倉第3号鏡の鳳凰表現を参考にすることは、多様な鳳凰表現がどのように系統に分かれ派生して各地で様々に異なる鳳凰表現がどのように生み出されたかの推定において有効である。

1.4 おわりに

分類分析は様々な角度から行えるものなので、より細かく分析することで今まで言及されていない文様の特定や文様の再確認・再検討、複雑な文様の構成解明や曖昧であったものが確かなものへと変わり幅広い活用が期待できる。そしてその結果を各時代に残る文様と照らし合わせることで、消えていった文様や変化・展開していった文様が「何故消えたのか」「何故変化する必要があったのか」を文様の精確な意味から考え、その当時の遺物や文献史料を組み合わせて考察することで、その時代の情勢や意識をより明確にできる可能性を持っている。今回の鳳凰の分析は大まかな形状分類分析なので、これからの課題は羽や鶏冠などの各形状コンテンツの中でも比重をつけていくことで更なる細かい文様分析を行い、文様を詳細に追求していくことである。